

「怒り」★★★★

2016（平成28）年7月11日鑑賞＜東宝試写室＞

監督・脚本：李相日

原作：吉田修一『怒り（上・下）』（中央公論）

東京編

大西直人（住所不定、新宿で優馬が出会った無職の男）／綾野剛

薫（直人の過去を知る女）／高畑充希

藤田優馬（大手通信会社に勤めるエリートサラリーマン）／妻夫木聡

藤田貴子（優馬の母）／原日出子

千葉編

横洋平（千葉の漁業組合で働く愛子の父）／渡辺謙

田代哲也（前歴不詳、漁協に仕事を求めて現れた男）／松山ケンイチ

明日香（叔父の洋平を支えるしっかり者、愛子の従姉妹）／池脇千鶴

横愛子（家出から地元に帰ってきた洋平の娘、明日香の従姉妹）／宮崎あおい

沖縄編

田中信吾（無人島に籠もる男、バックパッカー）／森山未來

小宮山泉（離島に母と二人で引っ越してきた、辰也の同級生）／広瀬すず

知念辰哉（泉の同級生）／佐久本宝

警察

南条邦久（八王子署警部補）／ピエール瀧

北見壮介（八王子署巡査部長）／三浦貴大

早川（殺人犯、山神を知る男）／水澤紳吾

2016年・日本映画・142分

配給／東宝

＜『悪人』のタッグが再び！7人の豪華俳優陣が集結！＞

原作：吉田修一×監督・脚本：李相日のタッグによる『悪人』（10年）は、2011年の第34回日本アカデミー賞をはじめ数多くの賞を受賞し、さらに第34回モントリオール世界映画祭ワールドコンペティション部門では、深津絵里が最優秀女優賞を受賞する傑作だった（『シネマルーム25』210頁参照）。

あれから6年、そんな『悪人』のタッグに、新たに音楽：坂本龍一が加わった本作のチラシには、「映画史に深く刻まれる感動のヒューマンミステリードラマ」と書かれている。さらに、本作には渡辺謙を筆頭に、森山未來、松山ケンイチ、綾野剛、広瀬すず、宮崎あおい、妻夫木聡という、今の日本を代表する7人の俳優が集結したからすごい。私は本作の予告編を何度も観たが、そこでは壁の上に血で書かれた「怒」の文字のインパクトがすごい。また、渡辺謙が苦悩している表情も印象的だ。そんな本作は、いかなる感動のヒューマンミステリードラマに・・・？

＜本作の「統一テーマ」は？整形の効用は？＞

本作の「統一テーマ」は、「愛した人は、殺人犯だったのか？それでも、あなたを信じたい」というもの。つまり、自分の愛する男が指名手配されている殺人犯の顔とどうしても重なって見える時、その女性（男性）はどこまで愛する男を信じることができるかという極めて難しいテーマだ。したがって、本作はあくまでヒューマンミステリードラマであって、犯罪モノ、捜査モノではない。そこで、警察官としては八王子署の警部補、南条邦久（ピエール瀧）と巡査部長、北見壮介（三浦貴大）が登場するものの、この2人はあくまでストーリーの引き立て役にとどまっている。

ある夏の暑い夜、八王子で尾木夫婦殺人事件が発生！2人の刑事が現場に乗り込むと、蒸し風呂状態の窓は閉め切られており、壁には『怒』の血文字が残されていた。そして、顔を整形した犯人は逃亡を続けており、その行方はいまだ知らなかった。そんな中、八王子署は犯人の手配写真を作り、これをあるテレビ番組で公開した。犯人の名前は山神。その風貌の特徴は？そのモニタージュ写真は？しかし、その反響は？

指名手配された殺人犯が顔を整形して逃亡する物語は、藤山直美主演の『顔』（00年）や百田尚樹原作、大九明子監督の『モンスター』（13年）（『シネマルーム30』未掲載）が典型だが、整形ってホントにそれほどの効用があるの・・・？

＜この3人の誰かが殺人犯？＞

本作は、東京編、千葉編、沖縄編と3つの舞台に分け、それを複雑に交差させながら3つのストーリーを展開させていく。3つの舞台の主役になるのは、①新宿に住む無職の男、大西直人（綾野剛）（東京編）、②漁協に仕事を求めて現れた男、田代哲也（松山ケンイチ）（千葉編）、③民宿「さんご」でアルバイトを始めたバックパッカーの男、田中信吾（森山未來）（沖縄編）、という、いずれも曰く因縁ありげな3人の男たちだ。問題は、その顔がなんとなくあのテレビ番組で公開された殺人犯の公開写真とよく似ていること。自分が愛する男が、殺人犯として指名手配されている写真の男と同一人物ではないかと一瞬でも思ってしまったら・・・？

愛する男を心配するのが女に限らないところは今風（？）で、「東京編」では一方で直人を愛しながら、他方で殺人犯ではないかという疑いをかけるのは、大手通信会社に勤めるエリートサラリーマンの優馬（妻夫木聡）。「千葉編」では、哲也を愛する女は3カ月に渡る突然の家出から地元に帰ってきた愛子（宮崎あおい）、その父親が千葉の漁業組合で働く洋平（渡辺謙）、そして洋平を支えるしっかり者の愛子の従姉妹が明日香（池脇千鶴）だ。また、「沖縄編」の登場人物は、沖縄の離島に母と2人で引っ越してきた高校生の小宮山泉（広瀬すず）と、そのボーイフレンドの知念辰哉（佐久本宝）の2人。そして、彼らが偶然無人島に遊びに行った時に知り合い、友人になった信吾を軸とし、ある日、泉に起きた米兵によるレイプ事件を巡って、何とも息苦しい物語が展開していくことになる。

この3つの舞台で、別々に展開される3つの物語を1つに結びつけるのは、あの公開された指名手配の写真。その写真を見ている限り、3人ともその写真の男に似ているような、似ていないような・・・？ひょっとして、この3人のうちの誰かが殺人犯？そう思えるような、思えないような・・・？

＜沖縄編だけは、少しヘン・・・？＞

前述したとおり、本作の「統一テーマ」は「愛した人は、殺人犯だったのか？それでも、あなたを信じたい」というもの。そして、東京編、千葉編ではそのテーマがピッタリとハマっているが、沖縄編では少しヘン・・・？沖縄編では、愛し愛される男女は同級生でまだ若い泉と辰哉であって、信吾はこの2人が無人島で出会ったバックパッカーの男にすぎない。たしかに、泉は信吾に対して憧れを持っているようだが、それは愛というにはほど遠いものだ。

また、沖縄編ではある日、泉が米兵によってレイプされるという惨劇が発生し、それがその後の3人の生きざまに大きく影響するが、私にはこのレイプ事件の発生における泉の「不注意」が気になって仕方がない。その不注意とは、偶然辰哉とはぐれてしまったとはいえ、米兵たちが酔って騒いでいる飲み屋街を泉が1人で歩き回ることだ。高校生にもなれば、そこらあたりは十分用心しなければダメなことは明らかだ。さらに、米兵によるレイプの現場を側で見ながら、腰が抜けてしまい何もできなかったという辰哉ののだらしなさにもアレレ・・・。

広瀬すずと佐久本宝の2人の若手俳優の演技は、李相日監督の特訓もあってそれなりのものがあるが、そこらあたりのストーリー構成が私には少し不満・・・。

＜小説ではスリリングでも、映像ではちょっと・・・＞

本作は、映画評論家たちの評価が高い。キネマ旬報2016年7月下旬号の「キネマ旬報が選ぶみんなが観たい、いい映画55」の一本に入っているし、そこでの評価は軒並み高く、ベタ褒め状態だ。7人の豪華俳優陣が織りなす3つの舞台での3つの物語は、それぞれ一本の映画になるようなスリリングなストーリーであるうえ、7人の俳優たちがその演技力を競い合っている（？）こともあって、それぞれの熱演ぶりもすごいから、見応えがある。

私もそのあたりは高く評価するのだが、本作の本来のテーマである「愛した人は、殺人犯だったのか？」を巡って展開していく「犯人は誰だ？」のミステリードラマは、小説ではスリリングかもしれないが、映像ではちょっと・・・？つまり、小説では文章の中で、あの男が似ている、いや、この男が似ている、と一人一人の読者が想像をたくましくしていくのだが、スクリーン上で指名手配されている男の写真をもロに見せられたり、八王子の住宅街で起きた尾木夫婦殺害事件の回想シーンを見せられると、映画の観客は「すわ、この男が犯人！」とすでに想像してしまうわけだ。

さらに、本作ではラスト近くに至って、別の傷害事件で逮捕された、山神を知る男、早川（水澤紳吾）が登場する。そして、その尋問の中であの忌まわしい事件がスクリーン上に再現され、犯人とされる山神の風貌はもちろん、その動きも観客の目にさらされていくので、「あつこの男は・・・」とすぐに連想してしまう。もちろん、それが正しいのかどうかはわからないが、こりゃ誰がどう見ても、〇〇あるいは△△そっくりじゃないの・・・？